

くらし：家庭

くらしのなかの ジェンダー

15

性差別の問題が根底に

美術史・美術批評

小勝 禮子さん

今、愛知県で開催されているあいちトリエンナーレの国際現代美術展に

展示された「表現の不自由展・その後」が、政治家や一般人の批判・攻撃によって展示中止に追い込まれた事件は知る人も多いでしょう。

これは「表現の自由」を侵害する検閲だとして、出品アーティストや表現に関わる多くの団体から反対表明が出されている

のですが、ジェンダーの視点から見た問題がその根底にあることはあまり指摘されていません。

日本のアートとジェンダーをめぐるトピックを振り返ってみましょう。

1980年代前後から「ジェンダー」という概念が女性学で使われるようになり、1997、98年、ジェンダーの視点が美術史や美術展にも導入されると同時に、それに対する批判が、主に男性

「表現の不自由展」中止



「揺れる女／揺らぐイメージ」展展示風景 (1997年、栃木県立美術館)。「ジェンダー論争」で批判された展覧会の一つ。企画：筆者。作品：笠原恵実子《PINK #9》

研究者やジャーナリストから湧き起こり「ジェンダー論争」と呼ばれる一連の議論の応酬がありました。

しかし美術の世界に限られたジェンダー論争より社会的影響力が大きかったのは、2004、06年の「ジェンダーフリー

・バッシング／バックラッシュ」の方でしょう。性教育の現場から始まった保守系議員や学者等

によるバッシングの影響により、「男女同室着替え、男女同室宿泊、男女混合騎馬戦等」など極端な例を持ち出して、「ジェンダーフリー」という言葉を使用しないようにという通知が、06年政府から地方自治体に出されるに至りました。

「ジェンダーフリー」とどまらず、男女や性的マイノリティーの格差・差別が残存している現実を置き去りにしたまま、「ジェンダー」という概念も用済みになったというイメージが拡散されてしまいました。

現在、「平和の碑(少女

像)に対して攻撃をする人たちには、先のジェンダー・バッシングの担い手たちと同じ意識があることに気づかずにはいられません。

なぜ、あの少女像が「日本人の心を傷つける」のでしょうか？ 従軍「慰安婦」という負の歴史を否定する人たちの心には、日本人男性の尊厳を優先し、「女性の人權」をなおざりにしてよいとする考えが潜んでいるとしか思えないのです。

アートは美しいものを見せるだけではなく、社会に存在する偏見や差別を可視化し、見過ごされた人たちが物事を考えさせるきっかけを作ることのできるのです。

(第4月曜掲載)